

農水省

理研興業の木製高性能防雪柵

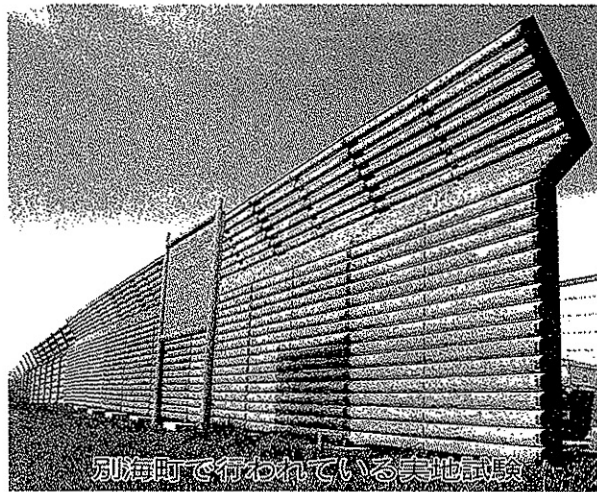
研究高度化事業に選定

道立林試等との研究開発に弾み

防雪柵メーカーの理研興業(株)(小樽、柴尾耕三社長)と北海道立林業試験場が共同で研究開発を行い、昨年から販売を開始した「木製高性能防雪柵」。強度性能が高い鋼材と景観性能に優れた木材を組み合わせたという新たな発想で注目を集めているが、この研究開発が農水省の「十六年度先端技術を活用した農林水産研究高度化事業」に採択され、今後三カ年で三千万円の助成を受けることが決まった。これにより、研究に一層の弾みがつくこととなり、その成果の製品へのフィードバックに期待が高まっている。

この事業は、現場に密着 道立林業試験場・林産試験場・北方建築総合研究所、独立行政法人防災科学技術研究所、北都物産(株)と共同で行う研究課題。題名は「カラマツ間伐材を用いた雪害対策と緑化用構造物の開発」。カラマツ間伐材の有効利用方を模索している道立林業試験場と、眺望や景観に対する関心の高まりを背景に木材を

利用した防雪柵を研究していた同社が共同で開発した木製防雪柵等について、一層の高度化を図ろうとしている。中でも封孔処理は、三菱化学グループが扱っている無機系の処理剤を使用し、ポリマーの形成により木の微細孔を完全に覆うことが可能となる。このため、耐久性、耐候性に優れ、非常に長期間にわたって効果が期待で



別海町で行われている実地試験

優れた発想に高い評価

設け、柵の背後に発生する剥離渦を抑制する構造となる間伐材の有効利用、冬道に軽減し、良好な視界を確保するなど、鋼製のものと同等の性能を目指した。昨年十二月の発売開始以来、防雪効果の確保と景観への配慮という二つの長所を兼ね備えた画期的製品として大きな反響を呼び、北海道開発局でも採用を検討するなど評価も高いが、今回の高度化事業の選定により、さらなる高い性能を有する製品の研究開発に弾みがつくことは明らか。観光立国の実現に向けた景観緑三法の成立を踏まえ、国や道が景観に関する指針等を策定。各種事業の推進にあたり景観保全の施策を強化する中、豊かな緑を守り健全な森林の育成に欠かせない

きるほか、防腐剤のよう外部へ薬剤が流出しないことから、環境への影響を大幅に低減する。また、柵形状についても同社が開発した高性能防雪柵の特徴を保持するよう工夫。半割とした丸太の流体力学特性を生かした単純な構造や、忍び返し部や誘導板を

間伐と、それにより発生する安全な交通確保に必要な防雪柵と景観との関係などは本道の大きな課題であり、そのキーワードとなる環境、景観、安全等に対し、一つの有効な答えとなるのがこの木製高性能防雪柵。同社の柴尾社長は「専門メーカーとして、時代が求める製品を生み出していくことは責務だと考えている。今後とも研究開発に力を入れ、自然や景観に配慮した製品、それぞれの地域の条件にマッチした製品の提供に努めていきたい」と話している。

詳細問い合わせは、同社(小樽市銭函三丁目二六三番地七、電話〇一三四一六二一〇〇三三、FAX6210088)まで。

防雪効果と景観性能を両立